

今日この地域は極めて *Static* で安定的な茶生産地域であるが、見落すことの出来ない一方の要因に兼業としての林業の役割が上げられる。林業は冬期の農閑期に行なわれるものであるが、耕地面積の減少性から茶収入のみは依存出来ないこの地域に於て、自営林業、或は、森林労務への従事によつて、農家収入を補う上には極めて有利な兼業であつた。現在、調査地域は水田所有、非所有の2部落落のタイプに分かれるが、一般的に非水田所有型の茶園+普通畑+森林の部落の方が消費生活が滞弊であるが、これは、この種の部落に於て山林業の結びつきがより大であるからと想われる。

即ち、田植時には茶製造へのより集約的労働投下が可能であると同時に、農閑期には、森林所有農家は、森林採伐或はしいたげ栽培業に従事し、下層農家に於ては上層農家への労働力提供という組み合わせでより多くの収入が得られるからである。この特色は、目を転ずれば、そのまま調査地域と他地域の関係にあてはまるもので、茶業経営と山林業の結合の堅実性を物語っているように見受けられるのである。

結びとして、離農者の増加傾向にある。今日の日本の農村地帯に比較し、なお一層茶業への努力が払われ、茶業振興を計る町の基本計画は、川根町の地域性があるのではないかと感じている次才である。

高原火山の地形とその農業土地利用

樋山 宏子

戦後食料増産、復興軍人救済のために、日本のあちこちで開拓が行われた。入植してノ8年の経過とともに、最近ではそれぞれその地域に合った農業形態を示している。この農業経営(農業土地利用)の変化は何によつて強く支配され、影響されているのかという事に向題をしばらく、一開拓地の例として栃木県の高原火山マ麓の入植地を調査した。

調査地域は、栃木県の北部に位置し、周囲48Km、直径約14Kmの火山であり、その東側に那須森林地が隣接している。

[自然環境]

高原火山は塩原火山、高原火山の西火山が併り合一して双子火山を作っている円錐火山である。この火山はオゾ紀層の基盤の弱線にそつて噴出したもので、洪積世中期ないし末期に形成されたものと推定される。この火山をオゾ紀層の山地、塩原火山、高原火山、熔岩流の堆積面、熔岩及び火山碎屑物の台地、浮石流の丘陵、寄生火山、放射谷、河岸段丘、谷底平

野に地形分類を行った。開拓部落は熔岩及び火山碎屑物の台地上にあり、南より北に向う傾斜を持つている。

土壌は、表土約40cmの黒色火山灰性壤土であり、酸性が強い。

海拔高度800~1000mの開拓部落付近では、気温が低く、無霜期間が短かく、冬には北西の風を強く受けるため土壌侵蝕が激しい。

(農業土地利用)

前述のようなる自然条件の下で、昭和27年から入植し、開拓が行われた。この地域の農業経営「作付」の変化を追ってみると次の様に分けることが出来る。

(1) 昭27~28年

食料増産と復員軍人の救済を主な目的に始められ、一応失対の目的は達せられた時期である。土地条件の悪さ、自然条件の制約の為に収穫不良で、あわ、ひえ、麦などを中心とした主穀農業であった。わずかな換金作物として馬鈴薯が作られていた。

(2) 27~29年

この3年間続いて冷害を受け、やつと軌道に乗り始めていた農家経営に大打撃を与えた。この冷害が契機となつて、この地域の自然条件にあつた作物を作り出す努力がなされ、商品作物への転換が行われるのである。

(3) 30年~36年

自然条件にあつた作物として大根が作られるようになり、36年迄作付が圧倒的に伸びて来た。この商品作物としての大根の発展を促したものは、道路の整備と農協の成立による販売体制の確立によるものであつた。

(4) 現 在

大根に萎黄病という病気が入り、収穫が大幅に減つて来ており、大根の転換期を迎えている。かつての練馬大根がそうであつたように、この地域も大根の病気によつて減びていくようであり、対策として酪農を取り入れるような体制に進みつつある。

このような変化をして来た塩原町開拓部落の現況は、戸数34戸で、一戸当りの農家経営規模は、2.3ha~3ha、特に2.7ha~2.8haのところはピークがある。換金作物は高冷地大根で、主食の米と作らず換金作物に頼つている。塩原町開拓農協を通じて売つた36年の大根は、本数にして2340.800本、販売金額にして35,12000円にのぼる。

これを一農家当りに割出してみると、1,032,705 円になり、いわゆる7桁農家になっている。

前述の事柄により、この地域が現在のよう至高冷地大根の生産地になった理由をまとめてみると次のようになる。

○災害による転換（27-29年）

主穀農家から、自然条件に合つた商品作物栽培への転換になつた。

○道路の整備（27-28年）

開拓道路よりは、むしろ国有林の林道が開かれ、整備されたのであるが、この道路の整備によつて、作物が荷いたみせず、短時間で出荷できるようになつた。

○農協の成立（30年）

出荷体制の確立と販路の開拓がなされ、大根の出荷が伸びた。

○開拓政策の変化

開拓政策の変化を敏感に感じとり、作付の変化を持たらしている。

○地理的位置

高冷地にあるので、暖地とのより早く出荷出来、市場確保に有利であつた。

東京市場までトラックで5時間以内に出荷出来る事などの有利性を持つている。

以上の要素が相互に関係しつゝ、今日の作付状況を持たらしめたものと思われる。高度に商品化された大根が転換期に来ているこの地域では、今後酪農を取り入れ、牧草畑と大根畑との循環を行うか酪農に活路を求めるであろう。

鳴門の地理学的考察

三好 妙子

鳴門の地域性を明らかにする為に、地形と土地利用、及びこの地を占める地理的位置を軸として種々の調査を試みた。本論の構成は以下の如くである。

第一章 地域の概略

① 地域内の自然環境（地形、地質、土壌、気候 *etc*）

② 地域内の人文環境（市の変遷、人口 *etc*）

第二章 地形と土地利用

① 地形分類（山地、河堤、堤内低地塩田、干拓地 *etc*）